

## 黒ボク土におけるナシ新品種「あきづき」の着果管理法

[要約] ナシ新品種「あきづき」は、摘果時に果そう葉のある果実を優先して残し、1 m<sup>2</sup>当たりの着果数を9～10果とする。平均果重450～500g、収量4.0kg/m<sup>2</sup>以上、糖度12%程度を着果管理の目安とする。

茨城県農業総合センター園芸研究所

成果区分

技術参考

### 1. 背景・ねらい

(独)農業・生物系特定産業技術研究機構果樹研究所で育成されたナシ新品種「あきづき」は、9月中旬～10月上旬に収穫となる食味良好な赤ナシで、年次によりみつ症が多発する「豊水」や果実品質(特に肉質の硬さとザラツキ)に難のある「新高」にかえて普及が期待される。「あきづき」は花芽着生が不良で着果数の確保が難しいため、着果管理の目安設定と目安達成に向けた着果管理方法について検討する。

### 2. 成果の内容・特徴

- 1) 1 m<sup>2</sup>当たりの着果数と1 m<sup>2</sup>当たりの収量の間には正の相関関係が認められ、着果数が8～10果/m<sup>2</sup>の範囲内では、収量4.0kg/m<sup>2</sup>以上を確保できる(図1)。
- 2) 1 m<sup>2</sup>当たりの着果数と平均果重の間には負の相関関係が認められ、着果数が8～10果/m<sup>2</sup>の範囲内では、平均果重450g以上を確保できる(図2)。
- 3) 1 m<sup>2</sup>当たりの着果数と糖度の間には相関関係が認められない。糖度は年次により異なる傾向がみられる(図3)。
- 4) ①短果枝で果そう葉のある果実、②長果枝で果そう葉のある果実、③短果枝で果そう葉のない果実を比較すると①>②>③の順に果実肥大が良好である。最も小さい果実でも平均351gあり、販売可能である。また、糖度は最も低い場合でも11.5%あり、食味は問題ない(表1)。
- 5) 以上の結果から、ナシ「あきづき」では、摘果時に短果枝で果そう葉のある果実と長果枝で果そう葉のある果実を優先して残し、1 m<sup>2</sup>当たりの着果数を9～10果とする。平均果重450～500g、収量4.0kg/m<sup>2</sup>以上、糖度12%程度を着果管理の目安とする。

### 3. 成果の活用面・留意点

- 1) ナシ「あきづき」は収穫期が比較的遅い品種のため、果そう葉のない短果枝でも販売可能な大きさと糖度に達するため、着果数が不足する場合は利用する。
- 2) この成果は黒ボク土で栽培するナシ「あきづき」で活用する。
- 3) ナシ「あきづき」は花芽の確保が難しく、1 m<sup>2</sup>当たり10果以上の試験結果はない。

#### 4. 具体的データ

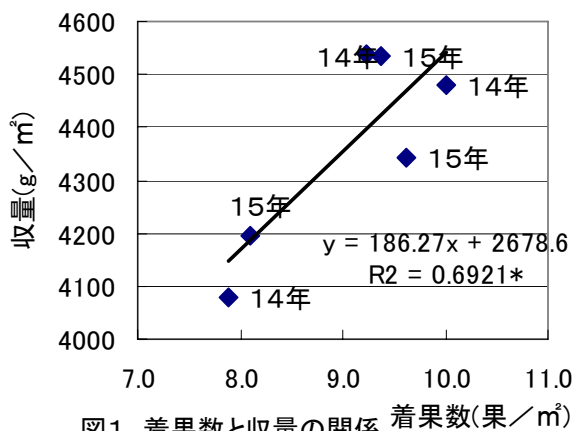


図1 着果数と収量の関係 着果数(果/㎡)  
(平成15年:樹齢12年生)

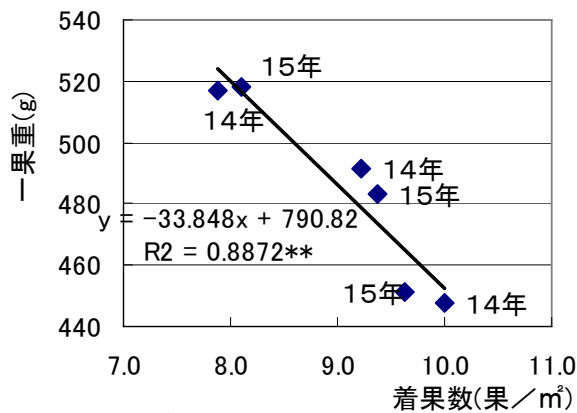


図2 着果数と一果重の関係  
(平成15年:樹齢12年生)

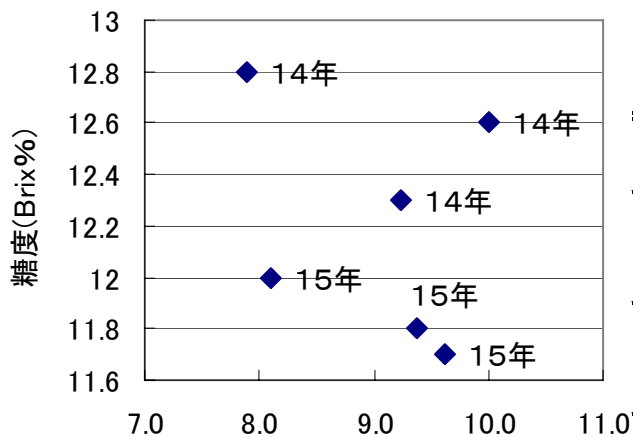


図3 着果数と糖度の関係 着果数(果/㎡)  
(平成15年:12年生)

表1 果そうの違いが果実肥大  
および糖度に及ぼす影響

年	樹齢	果そう	果そう葉 の有無	一果重 g	糖度 Brix%
14	11	短果枝	有	565a	12.7
		長果枝	有	442b	12.1
		短果枝	無	381c	12.4
15	12	短果枝	有	549a	12.0a
		長果枝	有	447b	11.9ab
		短果枝	無	351c	11.5b

注) 年次別に異なる英文字間で有意。

#### 5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

ナシ晩生新品種の高品質生産技術の開発・平成14～15年

・プロジェクト研究チーム ナシグループ